

英語活動 2年C組	なにが食べたいの？ “ What do you want ? ”	辻 伸幸
--------------	-------------------------------------	------

1. 単元設定の理由

(1) 本実践の主張点

本実践は、「食べ物」がテーマであった。児童たちにとって、「食べ物」は、日々の生活に欠かせない物であり、大きな楽しみの一つでもある。また、外国からの食べ物もどんどん日本に入ってきており、なじみの食べ物も多い。したがって、児童たちは興味・関心をもって本単元の学習課題に出合っていくことができた。

言語材料としては、以下のものを取りあげた。

言語材料				
What do you want ? I want ~ .				
bread,	cake,	curry and rice,	fried egg,	hamburger,
ice cream,	milk,	pizza,	rice,	salad,
sandwich,	spaghetti,	beef,	chicken,	sushi,
ramen				

本実践における主張点として、次の4点に焦点を当てた。

① 低学年の児童が、体全体を使って英語を楽しめる。

発達段階を考慮した英語活動の学習内容を計画することは、とても重要である。

低学年の児童は、英語のリズムや音声を聞こえてきたようにそのまま模倣することが上手である。この長所を十分に活用できるように配慮した。具体的には、歌やチャンツ、手遊び、クイズなどを使って英語のリズムや音声にたっぷりと親しませた。

② 英語によるコミュニケーション活動を行う中で、英語を使う喜びを味わえる。

低学年では、母語においてもコミュニケーション力を伸ばしていく時期である。したがって母語である日本語でのコミュニケーション力を高めることをしっかり取り組むようにした。母語とは違う英語を扱うことで、将来の言語によるコミュニケーション力に幅を与えることに期待したい。

英語活動では、英語のコミュニケーション力の素地を固めるようにした。

低学年の児童たちが英語を使ったゲームなどのコミュニケーション活動を行う中で、英語を使う喜びを少しでも味わえるようにした。

③ 英語活動が国際交流活動に連携する。

英語活動が、他の教科・領域と関連がなく、全く独立して行われるようでは、コミュニケーション力を伸ばすことはできない。そこで、大切になってくるのが国際交流活動と英語活動の連携である。英語活動で扱ってきた表現や単語を、実際に使える場面をつくり出したり、他の国の人々や文化に触れ関心を深めることができるのが国際交流活動である。交流活動を進める中で、伝えたいことや聞きたいことが生まれ、コミュニケーションに対する関心・意欲が高まっていく。

具体的には、和歌山大学の留学生とオーストラリアの小学校2校（ビクトリア州のスカイ小学校とニューヘブン学校）との交流活動を進めてきた。本単元では、実際に、留学生やオーストラリアの友だちに好きな食べ物は何かを尋ねたり、食べ物の好き嫌いを聞く活動を組み込んでいった。さらには、日本の伝統的な食べ物や外国の食べ物を発表し合ったり、日本で食べられる外国の料理を考えたりして、日本文化理解や異文化理解へもつなげ

るようにした。

④ ネイティブスピーカーとの効果的なチームティーチングを行う。

英語活動で、ネイティブスピーカーは重要な位置を占めている。しかし、ネイティブスピーカーに指導を丸投げしたり、依存を極端に強くすることは、学習内容や指導法が適切でなくなる危険性が高い。つまり、学級の児童、一人ひとりの個性や状況をしっかり把握できているのが担任の強みだからである。

研究会の授業は、担任単独の英語活動の授業であったが、普段の週1時間あるネイティブスピーカーとのチームティーチングでする英語活動をしっかりと行ってきた。具体的には、授業の事前、事後に活動内容を話し合ったり、反省を行ったりした。

今、日本中で小学校英語教育を必修にすべきかどうかの賛否をめぐる論争が起こっている。小学校英語教育が抱えている課題が大きすぎるので、反対論の正当性が出てくるとも理解できる。具体的な課題として、学習指針、教育内容、指導方法、教員養成、小中連携、国語教育の重要性、学習負担、学習格差などがある。しかし、なんといっても一番の課題が、指導者の問題である。外国語である英語を小学生に教える小学校教員が問われているのである。

本実践を通して、他の教科や領域とは違う「英語活動」の良さを、上記の4つの主張点を中心に検証することができた。

(2) 活動提案とのかかわり

学校提案である「互いのまなざしが響き合う学習 — 一人一人の確かなみとりと支援によって—」を、英語活動では、「児童たちが外国語を通してコミュニケーション活動を行いお互いの意志を伝え合う喜びを味わえる学習」とおさえた。

低学年では、まだまだ、お互いの意志を外国語である英語で伝え合い、その喜びを味わえる段階には、至らないことが多かった。したがって、その前段階としての素地づくりを大切に指導に当たった。

具体的に、次のような状態を英語活動上における低学年の素地とした。

- ・英語活動で歌ったり、踊ったり、クイズをしたり、伝え合ったりするなどして、楽しく活動でき、「英語って楽しいな。」と感ずることが出来る。
- ・児童の身近な英語（動物、食べ物、スポーツ、曜日、虫、おもちゃ、色、形など）に十分、慣れ親しみ、聞いて理解出来る。
- ・英語に特有の音声、リズムやイントネーションに十分、慣れ親しみ、まねることが出来る。

上記のような状態を創り出していくためには、担任がしっかりと児童たちの興味・関心・意欲や個性までもみとりながら適切な支援を行うことが必要なことが明らかになった。

2. 単元目標

◎食べ物の英語を使ったクイズやゲームで、友だちと楽しくコミュニケーション活動を行う。

- ・食べ物には、日本の伝統的な食べ物や外国の食べ物などがあることを知る。
- ・食べ物の名前を表す英語に興味をもち、それらの音声やリズムに慣れる。
- ・What do you want ? I want ~ . の言い方を知り、慣れる。

3. 単元計画

第1次 この食べ物、英語では？

食べ物をテーマに学習するための、興味付けの段階である。今まで、食べたことのあるいろいろな食べ物を思い出させ、その中から、日本の伝統的な食べ物や外国からきた食べ物を意識させた。

食べ物の英語での表現に慣れるため、新学社の「カードdeえいご」を使用する。このカードに対応したチャンツやカルタなどを行う。

第2次 何がほしいのかな？

無理に発声させるのではなく、まだまだ、たつぷりと食べ物に関する音声に慣れさせた。低学年にも、興味をもって行えるのがクイズである。クイズは、デジタルコンテンツを利用する。デジタルコンテンツは、画像も美しくテンポ良く使えるので、児童が集中して参加できた。

第3次 何が食べたいの？

第1時 ビンゴゲーム、ゲッシングゲーム

第2時 ジェスチャーゲーム、フードバスケット

第3時 インタビューゲーム（本時）

食べ物に関する英語にさらに慣れるとともに、実際にそれらの表現をゲーム活動（コミュニケーション活動）で使った。楽しく活動する中で、英語を使える喜びを体感した。



4. 単元の考察

(1) 主張点とかかわって

低学年の英語活動における発達段階からくる特徴には次のようなことが観察できた。

- ・英語という異言語に対し自然に接することができる。
- ・英語のリズムや音声を文字を意識せず、上手に模倣しようとする。
- ・歌や手遊びなどの表現活動を全身で楽しむことができる。
- ・簡単なゲーム活動を楽しめる。

以上の特徴を最大限に活用できるような教材、指導方法、学習環境づくり等を工夫したことによって、児童たちの英語活動に対する興味・関心や意欲・態度を十分、高めることができた。10月に行ったアンケートでは、英語活動を「好き」と感じている児童が一人を除き他の者全員となった。このことから児童の肯定的な取り組みが推察できた。

低学年なので、外国語である英語を使ってコミュニケーション活動を行うには、使える語彙や表現などの制限が多い。また、無理にたくさんの発話を強制することは、児童に負担を与えるだけで、英語嫌いを増やすだけである。したがって、低学年である児童たちが

英語をゲーム活動などのコミュニケーション活動の中で使える喜びを味わえるように工夫した。具体的には、ゲーム活動で行う内容を多様なもの（フードバスケット、カード集め、ゲッティングゲーム、インタビュー、ビンゴゲーム、ジェスチャーゲーム）にして、英語で遊べるようにした。遊びの中で英語を使う喜びを体感させることが、将来の英語でのコミュニケーション力を伸ばしていく基礎につながっていくことを期待したい。また、遊びを通して、外国語（英語）を体験し学ぶことができたことは大きな成果と考えている。

英語活動と国際交流活動の連携では、和歌山大学の留学生との国際交流活動で実現できた。11月に児童たちは、和歌山大学に行き、留学生と一緒に、外国の歌や遊びを交流することができた。その際、本単元で学んできた食べ物に関する歌と手遊び（“Hot cross buns”, “Ten fat sausages”）を留学生に教えることができた。

また、好きな食べ物を、海外の交流校（ビクトリア州のスカイ小学校とニューヘブソン学校）と絵手紙を交換する中で聞くこともできた。

本単元では、ネイティブスピーカーとの効果的なティームティーチングも組み込むことができた。例えば、授業で使う語彙や表現をネイティブスピーカーとの授業にも使用したり、語彙や表現に慣れる段階で、ネイティブスピーカーの発音でカルタ遊びをしたりした。さらに、授業前後に担任との話し合いをもち、指導内容の確認と反省も行うことができた。

（２）互いのまなざしが響き合う姿は

英語活動では、「互いのまなざしが響き合う学習 — 一人一人の確かなみとりと支援によって—」を、「児童たちが外国語を通してコミュニケーション活動を行いお互いの意志を伝え合う喜びを味わえる学習」とおさえた。しかし、低学年の児童たちがお互いの意志を外国語である英語で伝え合うには、語彙や表現、精神的発達などのいろいろな面から制限がある。したがって、目標につながる素地づくり（活動提案とのかかわりの項を参照）に焦点を当て、本単元を計画してきた。ゲーム活動など友だちとの遊びの中で、英語を使えたり、伝え合ったりできる喜びを味わうことができてきた。また、個々の児童の個性までもみとり、対人関係で支援の必要のある児童には、ゲーム活動中に参加できやすいように声かけなどを行ってきた。

5. 成果と課題

英語活動は、教科ではない。あくまでも、国際理解教育の一つに過ぎない。外国語や外国文化に慣れ親しみ、興味・関心や学習する意欲や態度を伸ばすのが目的である。そのことは国の方も方向性を出してはいるが、細かい学習指針や学習内容が出されていない。教育現場にとっては、今まで指導したことのない分野の指導目標や内容を立案しなければならなかった。それぞれの学校でそれらを立案し指導していく場合、一番、大事にしなければならないのが、子どもたちの発達段階に合ったものである。

英語活動での活動提案は、「児童たちが外国語を通してコミュニケーション活動を行いお互いの意志を伝え合う喜びを味わえる学習」であるが、これは、あくまで6年生の段階に置いて達成できるものであって、低学年はその素地づくりを目標にしたことは妥当であった。ほぼ全員が、英語活動を楽しいと捉えることができていた。当然ながら、英語嫌いになった児童はいない。なによりも、低学年の子どもたちの一番自然な状態である遊びの中で英語に触れることができたからだと考えられる。

中学年や高学年において、活動提案をどう具体化していくのかが今後の大きな課題である。特に、高学年が重要になってくる。なぜなら、中央教育審議会外国語専門部会は、小学校高学年に英語教育の必修化を提言したからである。文部科学省も予算を付けて英語活動の充実を行おうとしている。このような状況の中、担任が主体的に英語活動を指導していけるような研究はこれからも必要である。